

名探偵WHO'S WHO

日影丈吉



名探偵WHO'S WHO

日影丈吉

日影丈吉 (ひかげ・じょうきち)

1908年、東京生れ。

主な著訳書——『内部の真実』『恐怖博
物誌』『味覚幻想』『メグレと老婦人』

『死者の中から』ほか。

名探偵 WHO'S WHO

定価 980 円

昭和52年12月10日 第1刷発行

昭和53年1月30日 第2刷発行

著 者 日 影 丈 吉

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

発行所 朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州

印刷所 明善印刷株式会社

名探偵 WHO'S WHO

目次

I 名探偵ア・ラ・ホームズ

エルキュール・ポアロ 探偵は納税者か？

エラリー・クイーン 作家と探偵

マーティン・ヒューイット 胡桃と角砂糖

マックス・カラドス 能力の限界にいどむ

アルバート・キャンピオン トリックの生かし方

オーギュスト・デュバン 最初の論理的読物

ユージェーヌ・ヴァルモン 月賦はこわい

ヴァン・ドゥーゼン博士 幽霊も科学には弱い

ジョン・ソーンダイク はじめて顕微鏡を使った探偵

ペリー・メースン 人権擁護と探偵

ニロ・ウルフ 「再び探偵と納税について

49 45 41 37 33 29 25 21 17 13 9

II

レジ・フォーチュン くだばれ名探偵!

シャーロック・ホームズ きみのホームズ、ぼくのホームズ

すばらしい素人たち アマチュア

隅の老人 茶の間の名探偵

ニッキイ・ウェルト 語学と探偵

ソープ・ヘイズル びっくりトリック

プリンス・ザレスキー 推理と術学

ブリーストリー博士 事実と推論

スーザン・デア 美人でも探偵になれる

ミス・ジェーン・マーブル おふくろの味

アポット夫妻 アメリカ風前菜

ダゴベルト 素朴な証拠

ヘンリー・ボジオリ 馬鈴薯と爪サック

ロード・ダーシー 異次元の探偵

Ⅲ 脇役でない警官^{プロ}

バケット警部 先駆者の時代

マーチ捜査課長 不可能興味

ウィルソン警視 親子ユニオン・ジャック

ジョージ・ギデオンの 地域社会と警察

ジュール・メグレ バイブの使い方

コロンボ 貧乏礼讃

ステイヴ・キャレラ 生活者としての警官

マルティン・ベック ストックホルムの風邪ひき男

チャーリー・チャン 東洋人の出番

^{ハードボイルド}

Ⅳ 固ゆで卵からCIAへ

サム・スベード 私立探偵は実在するか

フィリップ・マローウ ハードボイルド作家はタフガイか

リュウ・アーチャー 女に髻

V 真夜中の探偵

マイク・ハマー ハードボイルド及びその批判の功罪
コーデリア・グレイ 小母さんには向く職業
007 ジェームズ・ボンド 原爆の傘をつぼめる
SAS プランス・マルコ 素人には書けない小説

アルセーヌ・リュパン 泥棒の書誌学

ジョゼフ・ルールタビエユ 犯罪者から生れた名探偵

サイモン・テンプラー ベテン師の後光

ラッフルズ イギリス的俠気

ニック・ヴェルヴェット 塵をぬすむ怪盗

VI 神と悪魔

ファーザー・ブラウン 神の物理学

アングル・アブナー 神のトリック

ラビ タルムードを持つ探偵

207 203 199

193 189 185 181 177

171 167 163 159

ジュール・ド・グランタン オカルトサイエンスと魔界捜査

マックス・カーニー 幽霊テレビ

*

ソロモンからコーデリアまで——名探偵の歴史——

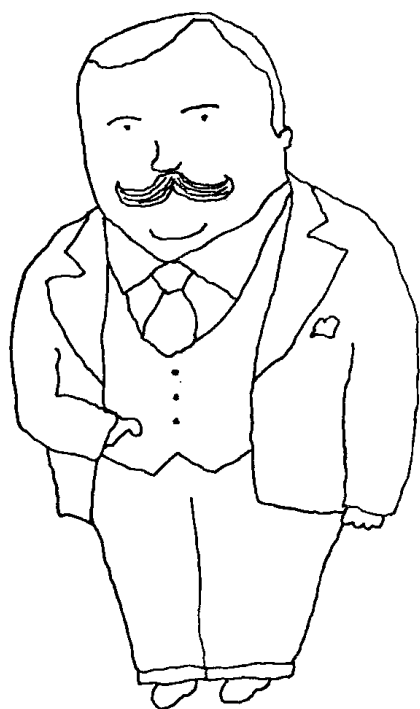
あとがき

253 219

215 211

装
幀
カ
ツ
ト
和
田
誠

I
名探偵ア・ラ・ホームズ



♣エルキュール・ポアロ

探偵は納税者か？

あいてが小説の探偵でも、いざつきあうとなれば、身分をたしかめておきたいと思うだろう。健全な市民としては当然だ。かれらも私達とおなじに、積極的かいやいやかは別として、納税の義務を果しているだろうか。パリ警視庁の有名なメグレ警視、アメリカの市警のコロンボ警部やコジャック警部補は本職の警官だから、公務員給料からさっぴかれると見ていい。ハードボイルドの私立探偵、サム・スベードやマイク・ハマーとなると、おとなしくまともに所得を申告しそくもない。ホームズやクイーンのような素人探偵の税金は、どういうことになるのか。特にエルキュール・ポアロの場合、彼の社会的位置は、かなり複雑微妙である。

殺人の女王という、ぶっそうな讃辞を受けたアガサ・クリステイが、一九一六年にはじめて書いた推理小説は『スタイルズ荘の怪事件』。第一次世界大戦中、ドイツ軍に侵略された母国ベルギーから、イギリスに避難して来て、スタイルズ・セント・メアリ村に滞在していたポアロも、はじめて登場し、世話になった下宿の女主人の死から、彼の有名な「灰色の脳髓」の活動がはじまる。その後、彼はロンドンで私立探偵を開業するが、イギリス社会にはアウトサイダーだった

ポアロが、市民税を払っていたかどうか、都民税滞納の前科のある私は、ちょっとした関心を持っている。

身長五フィート四インチの小男。卵型の頭をいつも、ちょっと傾^かげ、蠟でかためて両端をピンとはねあげた口ひげが自慢。一九七五年、シドニー・ルメット監督のパラマウント映画『オリエント急行殺人事件』が世界的にヒットした。ところが主演のアルバート・フィニイが扮したポアロが、その卵型の頭を七三に分けているのを見て、クリステイの愛読者は変な顔をした。みんな、あれは禿頭だと思っていたからだ。原作者も、ひげの形が気に入らないと、いつているが、私などにも、ポアロ物の最初の挿絵を描いたブロードヘッドと、彼に準拠した故松野一夫の翻訳挿絵のイメージが定着していて、それにフィニイはうまい役者だが、あまりにイギリス人くさいので違和感がある。やはりポアロはイギリス社会では、一人よがりの潔癖と絶大な自信が鼻につく、おかしな外人に過ぎないのだ。

世界的に有名な名探偵の典型の一人になったポアロを、いまさらイギリス的に見せようとしても無理で、原作者はそれを恐れて、『カーテン』の中で彼を殺してしまったのかも知れない。そういうえばブロードヘッドの挿絵もやはり、すこし変だ。ポアロは服装にうるさいというが、変りズボンのモーニングに蝶タイ、トールハットにエナメル靴というのは、イギリス人のコレクト趣味からは変則的で、あるいはフランス風のでたらめを、からかったのか。とにかく彼を、彼女の社会では疎外される者として描いた作者の視点は正しい。社会的孤独は、他人の運命に苛烈な眼をむける探偵の宿命でもある。

『スタイルズ荘の怪事件』の出版は一九二〇年。それから一九七五年に出した『カーテン』ポアロ最後の事件』まで、彼はクリステイの三十五の長篇と四十六の短篇に登場している。ポアロは去年死んだとして何歳だったのか。それについて、おもしろい考証をした人がある。ポアロはもとベルギーの高級警察官で、第一次大戦前に退職した。戦争が起っても復職させられなかったのを見ると定年退職で、むこうの定年は遅いから、スタイルズの頃は既に七十歳ぐらい、計算すると行年は百十七歳になるというのだ。作家は主人公の年齢には無関心なものなのか、日本の『銭形平次』も大シリーズだが、たくさんある作品の時代的背景になっている歴史的事実を、年表などでしらべた結果、平次親分は二百年も生きたことになるそうだ。クリステイも野村胡堂さんも、自分が生み出した主人公とはいえ、よくも長いこと、こき使ったものである。

だが、作家と主人公のつきあいも半世紀以上になると、もうただごとではない。主人公は単なる作者のかいらいではなく一個の、ときには史上の人物以上の、人格になっているのを作者も認めないわけには行かなくなる。クリステイは前からポアロの始末を考えていた。『カーテン』を書いたのは、実は第二次大戦中だった。戦争中、私達もそうだったように、たぶん彼女も死を覚悟したのか、ポアロの最後の事件と彼の死の構想をまとめ、その舞台になつかしいスタイルズ荘を持って来た。しかも作者とおなじ膝関節の病気で車椅子に釘づけにされた老後の名探偵を、そこにおいた。ポアロはもともと、拡大鏡を片手に地面をかきまわる捜査法を軽蔑し、純理的なアームチェア・デテクチヴに属している。その末路のような彼の姿は、作者の自嘲だろうか。

クリステイはこの作品を、すぐには発表しなかった。一応ポアロの始末をつけて安心し、自分

の死後に発表させるつもりだったようだ。それが何故か一九七五年突然、出版に踏みきった。そして年があけた七六年の一月十二日、この世界最大の人気推理作家は、ロンドン西郊ウオリングフォード村の自邸で、彼女が作品の中で殺した名探偵の後を追うように、この世を去ったのである。クリスティはポアロ物のほかに、たくさんの推理小説を書いたが、彼女の数少ない戯曲もふしぎなくらい好評で、ニューヨークやパリでも、しばしば上演されている。特に『ねずみとり』はロンドンで二十四年間続演、観客動員数三百五十万人以上という驚異的なロングラン記録をつけた。彼女が死んだ晩も、この戯曲はセント・マーチン劇場で九千六百十二回目の上演中だったが、劇場ではライトの光を落として作者の死を悼んだという。ポアロの税金のことはわからないが、クリスティが世界最高の多額納税推理作家だったのは間違いないだろう。

*

〈作者・主な作品〉

アガサ・クリスティ Agatha Christie (英・一八九〇—一九七六)

長篇は六十六冊あり、そのすべてが翻訳されている。代表作のひとつに『そして誰もいなくなった』(一九三九年〔早川〕、ポアロ物では、『スタイルズ荘の怪事件』(一九二〇年〔早川・創元〕、『アクロイド殺人事件』(一九二六年〔新潮・早川・創元〕、『ABC殺人事件』(一九三五年〔新潮・早川・創元〕、『カーテン』(一九七五年〔早川〕などがあり、短篇も『ヘラクレスの冒険』〔早川〕ほか多数ある。

注、〔早川〕は早川書房、〔創元〕は東京創元社、〔新潮〕は新潮社、〔角川〕は角川書店、以下同じ。

◆エラリー・クイーン 作家と探偵

名探偵は十九世紀後期に発生し、二十世紀の一桁あたりまでに、いろんな性格が出そろった。というときの、こ、何かみたいだが、きのこだとすれば珍種が、にぎやかにお目見えして、探偵小説という新しいジャンルの文芸を盛にしたのである。その中での大物は、たいがい一種の超人的犯罪研究者で、多少マニア的な自信家か、でなければ勤勉で意志的な上級警察官だった。私たちがあまり違わない平凡な現代人が主役をつとめるようになったのは、だいたい第一次世界大戦の終りごろからである。

アメリカは第一次大戦には直接の関係はなかったが、連合国側に参加した。その経済的武力的援助の功績で、戦後の西欧の政財界でも大きな顔ができるようになった。と同時に、アメリカの東部社会では新しい欧化の風潮がさかになる。一九二〇年代の経済バニックスを乗切ころ、それまで、このジャンルの首位をイギリスに奪われていたアメリカの出版界に、ヴァン・ダイン、ハメット、クイーンという三人の画期的な作家があらわれて、現代謎とき小説家の完成と、米国の新風の流行に大きな役割をはたした。特にクイーンは作品の質量や、ジャンルへの貢献度から

見て、この種の作家では世界最大といえるだろう。

エラリー・クイーンが、フレデリック・ダネイとマンフレッド・リーという同い年の従兄弟作家の筆名だということは有名だが、かれらは一九二九年に、はじめて書いた懸賞小説の応募原稿『ローマ帽子の謎』が当選してから、一九七一年の『心地よく秘密めいた場所』までに、ほぼ五十冊の長篇と短篇集を出している。七一年の四月に、リーのほうが亡くなって、かれらの共同執筆に終止符が打たれたわけだ。二人ともニューヨーク子だが、残ったダネイは七十を前にして、四十年おなじ名を分けあった、血のつながる友を失ったのだ。

ところで名探偵エラリー・クイーンの推理、冒険を語るのに何故、話し手（作者）はエラリー・クイーンでなければならなかったのか。共同制作の事実を秘匿する他意のない思いつきだという答えが、やや伝説的に伝えられているし、探偵に語らせるというのも単なる無邪気な思いつきかも知れない。しかし、クイーン以前の探偵には社会的にアウトサイダーか、または体制の擁護者である者が多かった。ところが、クイーンは当代の上層階級の一部に属し、公的な捜査権まで与えられながら、なお自己の属する階層に批判的な心情を持っているインテリ青年である。そういう人物にファンタスティックな現実性を持たせるために、作家Ⅱ探偵は、うまい設定ではなかったかと思うが、どうであろう。

つまり、ファンタスティックではあるが、クイーンは、モダンという言葉がはやった当時のアメリカの社会に密着した青年で、飛切りの秀才だとしても私たちと変りのない平凡人である。瘦せぎすで長身、微妙な気候の変化にも反応を示し、他人の意向にあれこれ気を使い、現場の環境が